

視点, 認知的距離, 心的態度

三 瓶 裕 文

1. はじめに

私たちが、好き嫌い、関心の有る無し等、さまざまな心理・認知のありようを持つ種(い)である以上、ある事態を言語で表現する際にも、事態に対する私たちの認知のありようが言語に反映すると考えられる。例えば、図1のような事態を表現する実験がある。¹⁾

- (1) a. Über einer Linie befindet sich ein Stern. 図1 *
b. Unter einem Stern steht eine Linie
-

被験者の約90%が星を主語にし(=1a)、線を主語にする(=1b)のは10%にとどまるという。線よりも星を認知的に近い、すなわち注目の焦点として捉え、そのような認知のありようの反映として星を主格・主語に具現すると想定される。²⁾ 次は、サッカーの試合結果の報道である。

- (2) a. Brasilien besiegte das DFB-Team mit 3:1. (Österr. Rundfunk, 17. 12. 1992)
b. Nationalelf verliert 1:3. (Hessische Allgemeine, 17. 12. 1992)

同一の試合結果の報道でも当事者でないオーストリアの報道では、勝者ブラジルチームを主語に、ドイツの報道ではドイツチームを主語にしている。ドイツチームへの心的近さ³⁾の言語的反映と察せられる。わずか二例の観察であるが、事態に対する私たちの認知のありようの言語的反映に関して、Engelkamp (1974)のIch-Näheを踏まえ、⁴⁾ 次のよ

1) Schecker (1998: 134f.)の実験による。星が主語の文は便宜上一つにまとめた。

2) 認知心理学の「図一地一分節 (Figur-Grund-Gliederung)」の枠組では、星の方が「知覚的に際立つ図」と捉えられやすく、「統語論的な図」として主語に具現することになる。Ungerer/Schmid (1996) 参照。しかし本稿のように、図と地という二分法ではなく、伸縮性のある「距離」を軸にすることで、視点の連続的な移動性、それに伴う複数の Varianten の存在、種々の含意などを十全に捉えることが期待される。

3) 「認知的」は、「心理的」も含意することとする。なお「対象」は、話者にとって他の要素よりも認知的に近い要素、いわば認知的焦点であるが、本稿では単に「対象」と呼ぶことが多い。

4) Engelkamp (1974: 160), また Schecker (1998) も参照。

では部分的に援用するにとどめる。

2. 直示 (Deixis) 表現: 指示詞 *dieser, der*

指示冠詞や指示代名詞の基本機能は「直示」であり、話者は、自分の近くにある、レーマ的な指示対象に聞き手の視点を接近させる。つまり、話者と対象との一次元的な「距離」が問題である。これに対し、定冠詞や人称代名詞などの「照応」(Anapher) 表現は、前方、後方、外界という三通りの照応のどれかで特定できる、いわば既知という前提の合図、それによるテーマの維持・連続であり、距離に関しては中立である。⁷⁾ ここでの眼目は、指示詞には、物理的距離に基づく通常の「直示」機能、すなわち、話者が指し示せる領域 (Zeigfeld) 内にある対象を指示、聞き手の視点をそれに向けること (Perspektivische Orientierung)⁸⁾ の他に、話者にとって「認知的に近い」対象を「直示」する機能があり、話者の強い心的態度「好悪」を含意することを例証することにある。まずは通常の「直示」である。

- (3) [...] dann fragte er eine Verkäuferin: „Was kostet *dieses* Hemd?“ und [...].
(Wölfel, Garten: 12)⁹⁾

- (4) Gisela zeigte Hanna das Gästezimmer und half ihr beim Kofferauspacken. Den Rucksack stellte Hanna in den Schrank. „*Den* pack ich morgen aus“, sagte sie.
(Wölfel, Hanna: 20)

話者の発話意図は、直示表現を用いることで、自分の近くにある指示対象に聞き手の注意をいわば強制的に向け、指示対象として特定させることにある。平たく言えば、例えば (3) で店員は、*dieses* を聞いたなら、眼を客である話者の近くに向けるだけで指示対象を特定できるわけである。次の (5), (6) は指示詞を文脈指示に用いた例だが、いずれも「直前、近距離」の名詞に読者の視点を誘導、指示対象として特定させる。

- (5) [...] durfte er sich vorn neben Herrn Hollack setzen, und *dieser* ließ ihn [...] die Winker bedienen. (Kästner, Pünktchen: 145)

7) Deixis と Anapher, とりわけ前者について Ehlich (1983b) 参照。定冠詞の直示的用法は考察の対象としない。便宜上、*der* を指示代名詞、*dieser* を指示冠詞と呼ぶことがある。聞き手にとっての *Bekanntheit* の関連で Bisle-Müller (1991: 37 f.) 参照。Weinrich (1993) は、指示代名詞 *der/die/das* を *rhematische Referenz-Pronomina*, 人称代名詞 *er/sie/es* を *thematische Referenz-Pronomina* と呼び、前者には〈AUFFÄLLIGKEIT〉と〈BÜNDELUNG〉、後者には〈BEKANNT〉と〈UNAUFFÄLLIGKEIT〉という意味特徴を付与している。なお、Schanen (1996) には音調をも視野に入れた観察がある。

8) Ehlich (1983a) は Eichendorff の作品を素材に、ダイクシス表現が読者の視点を作中世界に誘導、読者を作中世界に引き入れることを述べている。

9) 紙面節約のため、例文出典の作品名は略記する。また、一部、再録の例文もあるが、初出の箇所をその都度挙げることは省いた。なお以下、例文中のイタリックはすべて筆者(三瓶)による。

- (6) Uli kam hoch und stellte einen Fuß auf Peters Hand, *der* warf sich zur Seite und riß Uli am Knöchel, aber nun lag *der* auf ihm und [...] (Wölfel, Rächer: 82)

さて、本題の、心的態度「好悪」である。対象が、物理的には遠く(=Zeigfeldの外)とも、認知的には近い、すなわち、対象への強い心的態度:「好意」や「反感」を持つ場合、その言語的反映として指示詞を用いることがある。(7)は『飛ぶ教室』の一場面、校長先生の部屋から出たところでの発言である。指示の同一性(Referenzidentität)は、指示冠詞、定冠詞、いずれでも保証される。しかし、作中人物 Matthias の校長先生への敬愛の情の発露には *dieser* が適する。

- (7) Da standen sie auf, [...] und verließen leise das Zimmer. [...] Auf der Treppe sagte Matthias: „Für *diesen* Mann / ?*den* Mann da oben laß ich mich, wenn's sein muß, aufhängen.“¹⁰⁾ (Kästner, Klassenzimmer: 76)

次例の第一文の *der* も、Mikame (1998) で論じたように「認知的近さ」の表出と捉えられる。第二文、作中人物の激した感情の表出には指示代名詞 *den* が合う。

- (8) [...] das ist nämlich mein Freund, *der* ist immer so traurig, weil [...]. „Ein richtiges Waisenkind, wie im Märchen?“ fragte Uli. „Wenn du dich über *den*?*ihn* lustig machst, hau ich dir alle Knochen zu Brei!“ sagte Peter. (Wölfel, Rächer: 107)

強い心的態度は「好意」に限らない。指示詞に関しては、わけでも *dieser* の場合は、「反感」の表出であることも多い。次例はまず Erben (1980: 228 f.) によって、次いで Bisle-Müller (1991: 70) によって引用された箇所である。

- (9) »Da hat nun *dieser* Herr Naphta — ich sage >*dieser* Herr«, um anzudeuten, daß ich durchaus nicht unbedingt mit ihm sympathisiere, sondern mich im Gegenteil innerlich höchst reserviert verhalte —« (Mann, Zauberberg: 565)

次の場面、家族が皆、めいの Hanna にかかりつきりなので妬んでいる Kilian の発言。

- (10) Du willst ja nur wissen, ob deine Suppe gut genug ist für *diese* Prinzessin Hanna. (Wölfel, Hanna: 15)

「反感」の対象である少年を、Anton は人称代名詞でなく指示代名詞で指示し続ける。

- (11) „Anton, es gibt noch einen, *der* mir nicht gefällt. [...] Gottfried Klepperbein heißt er.“ Anton sagte: „Du, *den* kenn ich. *Der* geht in meine Schule, eine Klasse höher. Na warte, *den* werde ich mal aus dem Anzug stoßen.“ (Kästner, Pünkt-

10) 疑問符?の有無は、選択の傾向を表すのであって、容認可能性の度合いではない。

chen: 48)

次は指示冠詞, 指示代名詞が共に「反感」を含意している例。¹¹⁾

- (12) *Diese* Hanna, *die* ist ja wohl aus Glas oder so? *Die* habt ihr alle viel lieber als mich.
(Wölfel, Hanna: 22)

「直示」の指示詞が, 強い心的態度, レーマ性(Rhematizität)の表出であるのに対し, 先に述べたように, 「照応」の人称代名詞や定冠詞は, 指示対象が既知, テーマ性という前提を持つ。¹²⁾ 次例は, 病院で妻が出産直後に死亡してしまい, 夫である Laszlo が一人で赤子を家に連れて来て, 留守を守っていた子供たちと赤子を対面させる場面である。赤子の存在自体は既知, 前提とされているので指示詞 *Das* でなく人称代名詞 *es* の使用となる。

- (13) Laszlo trug den Korb in die große Stube und stellte ihn auf den Esstisch. [...].
„*Es*/??*Das* ist ein Mädchen“, sagte er. (Wölfel, Haus: 9)

例文(14)では, 対象である父親に対する少年の高ぶった感情が徐々に落ちついていき, 対象に対して距離を置いた冷静な態度となってゆく。この気持ちの変化を, 聞き手や読者は, 強から弱への音調変化, 指示代名詞 *der* から人称代名詞 *er* への変化に見てとるわけである。

- (14) „Und dein Vater?“ Joschi bückte sich und [...]. „*Der*?“ sagte er. „*Der* ist weit weg. In einer anderen Stadt. *Der* kümmert sich doch nicht mehr um uns. *Er* hat eine andere Frau geheiratet, und jetzt hat *er* andere Kinder.“ (Wölfel, Garten: 34)

3. 受動文

前節では, 語彙レベルの言語表現として指示詞を取り上げ, これらが通常の直示の他に, 話者の指示対象に対する認知的近さ, 強い心的態度「好悪」の表出となることを見た。本節では, 第1節で見た「主格・主語化」の延長線上にある, 文レベルの言語表現として, 受動文を取り上げる。なおこれらについては既に三瓶(1994), Mikami(1996b)に詳細な分析がある。ここでは受動文の含意と認知的近さの連関性の一部をか

11) *dieser* と *der* は, 「近さ」や「心的態度」, 「指示力」の度合いの差に基づく, 一応の棲み分けはあるが, 十全な記述のためには前者には通常と対照という二様の強勢があることも視野に入れた分析が必要であろう。

12) 人称代名詞は聞き手にとって既知という前提があるので省略形 *'s* が可能である: „wenn du mir zehn Mark gibst, verrät ich's nicht. Sonst sag ich's deinem Vater.“ (Kästner, Pünktchen: 19)。なお, 人称代名詞, 定冠詞における Identifizierbarkeit/Identifiziertheit について Schanen (1996: 149 ff.) 参照。

いつまんで述べるにとどめる。¹³⁾

能動文が対象から距離を置いた中立・客観的な視点の反映なのに対し、受動文は行為を受ける対象(典型的には Patient)を注目の焦点とし、視点の接近の反映として対象を主格・主語で実現、そこから事態を描写する表現である。¹⁴⁾ 行為の目標点(Zielpunkt der verbalen Handlung)¹⁵⁾である対象近くに、視点があるので、行為の影響、行為の完了をいわば直接知覚できる。そのために「被影響、被関与」の含意が生じる。このことの裏付けとして Zifonun (1992: 266)がある。Zifonun によると、能動文(15)

(15) Karl traf Fritz.

は begegnen の意味と berühren, verletzen の意味とで潜在的に二義だが、受動文(16)

(16) Fritz wurde von Karl getroffen.

では begegnen の読みは消え、berühren, verletzen の読み、すなわち「影響」に一義的に定まるといふ。

さらに、裏返し of 傍証として、非完了的な動作態様の動詞、すなわち「影響性」が低い動詞による受動文形成の困難さがある。(17)は Engelkamp (1974: 152)からの借用例である。

(17) *Das Geld wird von dem Dieb besessen.

受動文には、「被影響」の他にも、「感情移入」、「特徴づけ」、「結果性」等の含意があり、これらの含意も、視点的近さと直接知覚という原理の統率のもとにあるが、ここではこのことを指摘するにとどめる。¹⁶⁾

4. 準体験話法——間接話法と体験話法の間で——

語り手(Erzähler)が、一貫して語り手の視点から、すなわち、作中人物や作中人物の発言・思考の内容から「距離を置いて」作中人物の思考や発言を再現するには間接話法を用いる。作中人物の心的態度を表す心態詞や方言、破格の構文、作中人物の視点からのダイクシス表現などは、そのままの形では再現されない。つまり、「心理や感情が濾過、捨象」される。¹⁷⁾しかし、第1節でも示唆したように、語り手の視点は、作中人物への認知的距離に応じ、語り手と作中人物という両極間の連続的なスカーラ上を動く。このことの自然な推論として、語り手が視点を作中人物に近づけるにつれて、作中人物

13) 受動文使用の重要な目的にテーマ連続、動作主の背景化と前景化など一連のテクスト的機能がある。Mikame (1996b) 参照。

14) 三瓶(1994), Mikame (1996b) 参照。

15) Eroms (1998: 59)。

16) Mikame (1996b) 参照。

17) Steinberg (1971), Vogt (1990), 三瓶 (1996a: 42f.) 等参照。

の心理が濾過されずに浮かび出て来る、いわば準体験話法とも呼べる話法の存在が予想される。この想定の実証が本節の課題である。そのためのお膳立てとして、まずは、語り手が、作中人物や作中人物の思考・発言内容から距離を置いた間接話法である。

- (18) Er verdiente viel Geld, und viel zu tun hatte er auch. Seine Frau, Pünktchens Mutter, war allerdings anderer Meinung. Sie fand, er verdiene viel zuwenig Geld und arbeite viel zuviel. (Kästner, Pünktchen: 10)

次は中立を旨とする報道文。3人の政治家から等距離を保ちながら、一人一人の発言を連続的に引用する自由間接話法が使われている。

- (19) Den deutschen Autofahrern seien keine weiteren Belastungen zuzumuten, sagte Schröder. Besonders Pendler [...] würden durch eine Vignette belastet. Der Straßenbau müsse wie bisher aus dem allgemeinen Steueraufkommen finanziert werden. Stoiber wies dies als „unglaublich“ zurück. Schröder habe erst vor kurzem eine Erhöhung der Mineralölsteuer [...] angekündigt. [...]. Auch Bundeskanzler Helmut Kohl (CDU) hat sich in die Debatte eingeschaltet. [...]. Einerseits sei den Autofahrern keine weitere Belastung zuzumuten [...]. (Bietigheimer Zeitung, 23. 7. 1998)

次例は息子と母親との対話、「自由間接話法」であるが、語り手は視点を作中人物に接近、あたかも、半ば作中人物であるかのごとくに、つまり共同体験的に作中人物の心的態度、感情を再現する。音調も半ば作中人物の声色に近くなる。¹⁸⁾

- (20) [...], fragte er, ob er nicht bei einem Schulfreund wohnen dürfe? Bei einem in der Mörikestraße? *Nein, das sei jetzt* nicht mehr zu verabreden. Aber er möchte *doch* so gern! Und Frau Brasnik? Mit *der* wolle er *schon* reden. *Unmöglich. Die* sei *bestimmt* beleidigt. (Wölfel, Garten: 56)

第一文以降、一貫して接続法Ⅰ式が使われている。作中人物の発言を再現する自由間接話法である。しかし、元の発話のそのままの再現である *Nein*, *Unmöglich* や *jetzt*, 第2節で観察した指示代名詞 *das*, *der*, *Die* の使用, そして *doch*, *schon*, *bestimmt* 等の心態詞や話法詞の思考の主体が語り手でなく作中人物であることに見てとれるように、作中人物の生の声、強い心的態度の吐露である。Stanzel (1991) の用語を借りれば、「語り手が媒介する物語状況 (auktoriale Erzählsituation)」から、「作中人物に反映する物語状況 (personale Erzählsituation)」¹⁹⁾へと変わりつつある。体験話法性を帯びるという意味で準体験話法と呼べよう。²⁰⁾

18) 体験話法の音調について、Steinberg (1971: 15 f.) 参照。

19) 訳語は邦訳に拠る。

20) 体験話法の文献について保坂宗重 / 鈴木康志 (1993) 参照。

- (21) ① Er (=Petrus) erzählte ihnen, daß er ihren Rektor, Prof. Dr. Grünkern, gut kenne. ② Und wie es ihm gehe. ③ Und hier oben sei nicht viel zu sehen. ④ Denn der Himmel sei ja unsichtbar. ⑤ Und fotografieren dürften sie auch nicht. (Kästner, Klassenzimmer: 26)

接続法I式, II式の使用により, ①から⑤まで一貫して Petrus の発言の間接引用とわかるものの, ③の作中人物の視点からの表現 hier oben, ④の心態詞 ja, ⑤の主節現象, すなわち元の発話者(=作中人物)の強い心的態度の反映としての有標の語順など, 作中人物から距離を置いては窺い知れない作中人物の心理, 感情が共同体験的に描き出されている。²¹⁾

さらに, 語り手の視点が作中人物に近づくと, 体験話法となる。下線部が体験話法。

- (22) ① Evchen, Friederchen, Ulichen — die waren doch einfach zum Kotzen lieb und nett und süß! ② Peter sah, wie Uli zum Haus ging. ③ Schnell aus den Kleidern! ④ Sollten die doch gemütlich frühstücken mit ihrer Tante. ⑤ Er wollte vor ihnen auf der Insel sein. (Wölfel, Rächer: 42)

①語りの時制以外, -chen, 指示代名詞 die など想定される元の思考そのままの再現である。体験話法。②作中世界から距離を置いた語り手の視点からの背景描写, 地の文。③内的独白ともとれる体験話法。④有標の語順, 指示代名詞, 破格な (abweichend) 構文の一つである枠外配置や, doch など, 作中人物の心理を共同体験的に描出する体験話法である。

5. 結 語

本稿の目標は, 話者の対象に対する認知的距離, 視点のありようを軸とする原理が, 語彙レベルからテキストレベルに至る多様な言語表現の特性と機能を, 根底で統御していることを例証することであった。話者の視点が対象から「距離を置く」につれて「間接性」が増し, 逆に, 対象に近づくとつれて, 「直接性」が増すということが, 音調, 種々のレベルでの表現, 意味(心的態度のありようや含意を含む)に, 濃淡はあるものの反映することも示唆的に示した。この同じ原理の統率のもとにある言語現象には, さらに, daß 補文, 話法詞などがあるが, ここではただ, このことを言い添えるにとどめる。稿を改めねばならない。

21) 語り手が作中人物に視点を近づけるにつれて, 読者の視点も作中人物に接近, 作中人物の心理を共同体験する仕組みについては Mikame (1996b: 410f.) 参照。

図3 [間接性]

⇐ 視点 ⇒

[直接性]

話者———対象
基点 (Origo) 強

対象への心的態度, 注目度

弱

定冠詞

人称代名詞

能動文

間接話法

準体験話法

指示冠詞 dieser

指示代名詞 der

受動文

体験話法

[参考文献]

- Bisle-Müller, Hansjörg (1991): Artikelwörter im Deutschen: Semantische und pragmatische Aspekte ihrer Verwendung. Tübingen: Niemeyer.
- Dürscheid, Christa (1997): Perspektivierte Syntax. In: Dürscheid, C. / Ramers, K.-H. / Schwarz, M. (eds.). Sprache im Fokus. Festschrift für Heinz Vater zum 65. Geburtstag. Tübingen: Niemeyer. 241-257.
- Ehlich, Konrad (1983a): Literarische Landschaft und deiktische Prozedur: Eichendorff. In: Schweizer, Harro (ed.): Sprache und Raum: Psychologische und linguistische Aspekte der Aneignung und Verarbeitung von Räumlichkeit. Stuttgart: Metzler. 246-261.
- Ehlich, Konrad (1983b): Deixis und Anapher. In: Rauh, G. (ed.): Essays on Deixis. Tübingen: Narr. 79-93.
- Engelkamp, Johannes (1974): Psycholinguistik. München: Wilhelm Fink.
- Erben, Johannes (1980): Deutsche Grammatik: Ein Abriß. 12. Aufl. München: Hueber.
- Eroms, Hans-Werner (1998): Kasus, Rollen und Konversen. In: Vuillaume, M. (ed.): Die Kasus im Deutschen: Form und Inhalt. Tübingen: Stauffenburg Verlag. 57-70.
- 保坂宗重 / 鈴木康志 (1993): 『体験話法(自由間接話法)文献一覧——わが国における体験話法研究——』茨城大学教養部.
- 三瓶裕文 (1994): 「心的態度, 有標の視点と直接知覚」 千石喬 / 川島淳夫 / 新田春夫 編 『ドイツ語学研究 2』 東京: クロノス. 233-271.
- 三瓶裕文 (1996a): 「日本語とドイツ語の体験話法について——間接話法と自由直接話法の間で——」 『一橋論叢』 第115巻 第3号, 40-60.
- Mikame, Hirofumi (1996b): Markierte Perspektive, perspektivische Annäherung des Sprechers an das Objekt und direkte Wahrnehmung — Zur Signalisierung des psychisch-kognitiven Nähe des Sprechers zum Objekt —. In: Sprachwissenschaft Heft 4, 367-420.
- Mikame, Hirofumi (1997): Zum Demonstrativartikel *dieser* als Signal der subjektiven Einstellungen des Sprechers zum Referenten. In: Hayakawa, T. / Sengoku, T. / Kimura, N. / Hirao, K. (eds.), Sprache, Literatur und Kommunikation im kulturellen Wandel. Festschrift für Eijiro Iwasaki anlässlich seines 75. Geburtstags. Tokyo: Dogakusha, 155-178.

- Mikame, Hirofumi (1998): Relativsätze aus textpragmatischer Sicht. In: Donhauser, Karin / Eichinger, Ludwig M. (eds.) Deutsche Grammatik: Thema in Variationen. Festschrift für Hans-Werner Eroms zum 60. Geburtstag. Heidelberg: C. Winter. 101-120.
- 成田 節 (1995): 「“Perspektive” の概念について——構文研究の観点から——」『人文研究』大阪市立大学文学部紀要 第47巻 第10分冊, 161-178.
- Schanen, François (1996): *Das*: Demonstrativ? In: Pérennec, Marie-Hélène (ed.), *Pro-Formen Deutschen*. Tübingen: Stauffenburg Verlag. 147-160.
- Schecker, Michael (1998): Über den Nominativ und die Subjektivierung im Deutschen. In: Vuillaume, Marcel (ed.), *Die Kasus im Deutschen: Form und Inhalt*. Tübingen: Stauffenburg Verlag. 131-140.
- Stanzel, Frank K. (1991): *Theorie des Erzählens*. 5. Aufl. Göttingen: Vandenhoeck. 邦訳『物語の構造』前田彰一訳 (1989), 岩波書店.
- Steinberg, Günter (1971): *Erlebte Rede: Ihre Eigenart und ihre Formen in neuerer deutscher, französischer und englischer Erzählliteratur*. Teil I, II. Göppingen.
- Ungerer, F. / Schmid, H.-J. (1996): *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London: Longman. 邦訳『認知言語学入門』池上嘉彦他訳, 大修館書店.
- Vogt, Jochen (1990): *Aspekte erzählender Prosa: Eine Einführung in Erzähltechnik und Romantheorie*. 7. Aufl. Opladen: Westdeutscher Verlag.
- Weinrich, Harald (1993): *Textgrammatik der deutschen Sprache*. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: Duden.
- Zifonun, Gisela (1992): *Das Passiv im Deutschen: Agenten, Blockaden und (De-) Gradierungen*. In: Hoffman, Ludger (ed.), *Deutsche Syntax: Ansichten und Aussichten*. Berlin/New York: de Gruyter. 250-275.

引用例文出典

- Kästner, Erich: *Das fliegende Klassenzimmer*. Hamburg/Zürich, 149. Aufl. 1992.
- Kästner, Erich: *Pünktchen und Anton*. Hamburg/Zürich, 111. Aufl. 1991.
- Mann, Thomas: *Der Zauberberg*. In: *Gesammelte Werke in 13 Bänden*. Bd. 3, Frankfurt a.M.: S. Fischer, 1974.
- Wölfel, Ursula: *Joschis Garten*. Ravensburg: Otto Maier, 1973.
- Wölfel, Ursula: *Der rote Rächer*. Ravensburg: Otto Maier, 1979.
- Wölfel, Ursula: *Ein Haus für alle*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 2. Aufl. 1996.
- Wölfel, Ursula: *Hannas Reise*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 5. Aufl. 1998.
- Bietigheimer Zeitung, Bietigheim
- Hessische Allgemeine, Kassel